

平成 22 年度第 2 回富山県文化審議会

日時 平成 22 年 10 月 25 日（月）14:10～16:00

場所 県庁 4 階大会議室

- 議事
- ・ 国の文化行政の動き
 - ・ 文化に関する県民アンケート調査結果について
 - ・ 新世紀とやま文化振興計画改定（骨子たたき台）について

（会長） それでは議事を進めさせていただきます。本日は前回に引き続きまして、新世紀とやま文化振興計画の改定に係るご審議をいただきます。

初めに事務局から、最近の「国の文化行政の動き」、先般実施された「文化に関する県民アンケート調査の結果」及び「新世紀とやま文化振興計画の改定（骨子たたき台）について」の説明をお願いします。

〈事務局説明〉

（会長） ただ今「新世紀とやま文化振興計画の改定（骨子たたき台）について」等、事務局から説明がありましたが、ここで二つに分けてご意見をいただきたいと思います。

まずは、資料 1「国の文化行政の動き」や資料 2「文化に関する県民アンケート調査結果」を前段として、ご意見、ご感想をいただければありがたいと思います。後ほど「新世紀とやま文化振興計画」の改定についてご審議いただきたいと思います。

（〇〇委員） 今の時期になると、国会や議員会館に毎週のように陳情に行っております。国の文化予算というのは、姿勢はとて素晴らしいのですが、本当に寂しい限りであり、今年度は 1020 億円とかの数字でして、この数字は日本の芸術文化をすべて含んでおり、文化財の保存から全部入っています。例えば東京大学は立派な大学ですが、この東京大学 1 校の予算の半分です。これが日本の文化政策の全部の予算であり、これでありとあらゆる文化を支援するという事なので、もう少し増やしてくれという運動が中心です。

例えば韓国や中国は、日本の大体 4.5～5 倍の文化予算を組んでいます。もちろんヨーロッパあたりになると 10 倍ぐらいの差があります。そういったことを含めても、これからの

日本を一体どういう国にするのかということを考えてときに、文化的なことは、口で言うのはたやすいのですが、お金がかかるので、どうしても国に頼らざるを得ないのです。幸いなことに民間団体が国の無理解に関係なく非常にやる気になって、一生懸命やってくれていますので、これが救いです。ただ、文化芸術というのはあまり過保護にしすぎると駄目になるという傾向があります。まさに今の文化政策は日本の芸術団体を生かさず殺さずという言葉が当てはまっており、だから民間が頑張っているのかなと感じます。例えばヨーロッパはオーケストラやオペラ劇場や演劇などをわが町で持とうという声が民衆からわき出ます。日本はそうではなく、どうしても芸術家が中心になって仕事の間をつくらうとするので、最終的には国民のコンセンサスがどうしても弱いというのが大きな原因ではないかと思います。

ただ、富山県は、この文化審議会も含めて大変乗り気といたしますか、一つ一つの項目を知事さんを中心に考えてくださっており、私は富山県民の一人としてとても誇りに思います。

(〇〇委員) 国も県も、教育が大事というのは皆さんの一致するところだと思います。しかし、その教育をどうするかというときに、あまりものが見えてこないと思います。国の場合も、「コミュニケーション教育」や「芸術教育の充実」と言いますが、もっと違う観点が必要だと思います。

国の方を見ると、何か外に広がっていくような姿勢があまり感じられないのです。だから、その教育との連携は、取りも直さず文化をもっと身近にしようということの裏返しだと思います。美術館等の子どもへのサービスはもちろん大事にしなければいけないのですが、学校などにいるときも、そういうことが感じられるようなものにしていただければと常に思っています。

(会長) では、次に後段の「新世紀とやま文化振興計画改定(骨子たたき台)について」のご審議をいただきたいと思います。事務局からは、現計画の主な重点施策に対して、前回審議会等の各委員の意見や今回のアンケート調査結果、あるいは最近の国の施策を踏まえた計画改定の資料3、そして重点施策に関する論点整理の資料4が提示されておりますが、委員の皆さんには、こういった施策にさらに付け加えがあるかや、あるいは今後の予算化や計画に盛り込むための具体的な事業内容などのご意見をいただければと思います。

(〇〇委員) 国の第3次基本方針の策定に向けての議論の中でも「新しい公共」等の言葉が出ていますが、基本的にはこれから先、文化振興は誰が主体となって行っていくのかという部分をやはりきちんと押さえていく必要があると思います。日本の場合には概して明治以降、国家、政府があまり大きな役割を果たしてきませんでした。その中で、例えば地方自治体が1970年代あたりから文化振興の主役になってきています。ただ、どうしても地方自治体の場合には、やや箱物行政に走りすぎたきらいもありますが、日本としては国よりは地方自治体の方が文化振興に大きな役割を果たしてきたことは事実ではないかと思えます。

もう一つは、いろいろ問題もありますが、企業メセナをはじめとして、民間での支援、あるいは民間の芸術団体自身の努力も大きな役割を果たしてきたと思います。

これらを踏まえて、今後のことを考えるときに、新しい公共の議論というのはいろいろ解釈の仕方によって、全面的にどうかなというところもあるのですが、文化という世界自体は、政府の活動にはなじみやすいものでは決してありません。政府としては財政支援や環境整備がやらなければいけない課題であって、基本的には民間の立場で、芸術文化の専門家たち、あるいはそれを見たり地域の中でその成果を享受してきた人たち自身が主体となって担っていく必要があると思います。

こういう視点の中で、県の主な政策の中で私としては二つぐらい考え方を持っておりまして、一つは、公益法人改革とも絡めた形で、県の文化振興財団の役割が今後非常に重要になってくるのではないかと考えております。指定管理者制度等で財団の立場がどんどん弱くなっているのが現状ですが、私としては逆に、民間と行政とのつなぎ手として、富山県の文化振興財団は市町の財団や施設とも組んで非常に頑張っていると思います。しかし、やや文化施設の管理に寄っているのではないかと思います。もう少し広い意味で地域の文化を、県とは違った形で、もっと民間とのネットワークを通して高めていく必要があるのではないかと思います。

今までアマチュアの団体、プロの団体を含めて、さまざまな芸術活動をしている団体に対する支援が多かったわけですが、むしろそういったものを支えて社会につなげていくような活動をしている団体をきちんと支援の対象として取り組んでいくということが必要です。そのときには、きちんとどういう活動をしたかということのアカウンタビリティも必要です。

また、アマチュアの中でプロを目指そうとして、これから先、日本全体に発信していこうとか、世界と結んでいこうとしている団体に対して期間限定で、新しいチャレンジに対して、人件費も含めた支援をしていくことです。

このような形で、県の財団が独自の視点で、県・行政自体ではなかなかできないこと、あるいは市町村との連携の中でそういった活動をしていこうと考えて、富山においても検討しなければいけないということが1点目です。

2点目に、特に伝統文化の関係に関して、学生たちが就職となってくると、大学で習得した技法を生かした仕事に就けるチャンスはほとんどなく、一般の企業を目指すしかないというのが現状です。逆に言うと伝統産業の場合、人材養成というのは、教育も重要ですが、実際に活躍できる職場がきちんとなければいけません。

これは県ができる仕事というよりはもう少し民間の、伝統産業を守っている組合であったり企業であったり、こういったところがこういった形で今後自分たちの活動に対して展望を持っているかどうかです。こういったことは今までの行政の中に入れていませんでしたので、ぜひご検討願いたいです。

(〇〇委員) 芸術文化は金があればいいものではないのですが、なさすぎるのはいけません。だからといって県や国には期待しないで民間から集めたらといったら、このご時世です。

考えてみるとバブルのときも、バブルのときだからと言って企業が非常に積極的に文化団体に金を出してくれたかというところ、そうでもなかったです。要するに、先ほど申しましたように国民的なコンセンサスがないと、芸術文化はとても大事なものだと思ってもらえません。

やはり国民自体が豊かな日本、あるいは文化立国を目指すならば、われわれ一人一人がそういう意識を持つことが大事だと思っているのですが、なかなか理解は難しいですね。

(〇〇委員) 私自身が最近感じておりますのは、文化政策がここまで広がってきて、地域、国全体が関心を持ち、教育関係者も行政の方も経済人も関心を持たれ、一種の文化政策の知識基盤を共有できる条件が整ってきたのではないかと思います。

今まではどうしても行政の立場からの文化政策とか、企業は企業メセナとか、あるいは教育は学校教育にどう入れるかというようなことでやってきたのですが、共有が可能な

と思います。

例えば学校教育やまちづくりに芸術を入れるのも一つです。最近の調査でも、全国的に高校生の地域における食文化振興活動や商店街活性化活動が非常に活性化しておりまして、商店街があれだけ衰退している中で、高校生が地元の食材を文化資源として開発し、それを商品化するのです。それをいわば地域に密着したところでマーケットを開いていくというやり方で、少しずつ開いてみると、意外に広がりがまして、全国的に広がるというケースも結構ございます。ある意味で、今までとは違って、文化資源があればそれを産業化できる見通しが出てきたようでして、それが教育課程と結び付いているというのが大変面白いなと実感いたしました。

それには高校の先生のご指導が必ずありますし、地域の商工会議所が必ずかんでありますし、文化政策を担当する全国的なネットワークがありますので、それを全国に広めたり、研究成果として発表したりすることには一定の理解が得られます。そうしますと、そういう研究活動にお金を出してくれませんかという言い方をすると、実は中小企業の経営者が出してくださるというケースが結構あるのです。

実は企業メセナ協議会でも、結局は中小企業に頼って今まで全部やってきたのです。地域の文化資源を発見して、それをやってくれるというプロセスが芸術家の方で出てくると、それを地域の中小企業が支援しているのです。それで実は寄付金額もそんなに落ちないで今まで来たのです。

それと大学の先生方にもお願いすると、「たくさんは出せないけれども」と出してくださるケースが増えております。だから、知識基盤を共有する中から資金基盤を拡充する方法を開拓するというのは、今の時代に合っているのかなと感じております。

そういう課題で感じることは、地域のボランティアについて、例えば高校生がボランティアをしてくれるのですが、それをそのままにしておくとほとんど立ち枯れになります。就職となると関係ありませんので。ですから、そういうボランティア活動を専門性に高める何かが必要だと高校生の先生はおっしゃっておられます。

例えば商業科の学生ですと、それをどのように現代の、例えば文化経営学につなげて、専門的なマネジメントができる人間としてどう教育していったらいいのかということなのです。ボランティアのまま放っておいたのでは本当に続きません。そのときは頑張ってくれますが、持続的になどとてもできません。従って育成しようと思うと、必ず専門家への道を開かねばなりません。

ですから、文化ボランティアというのは、例えば施設を管理運営することで協力してもらうのであれば、やはりそこに施設のマネジメントを行う専門家として、専門家の道を開いていく必要があります。そういうものは今のところ各大学や各高校にはないので、やはり地域で、それこそ産官学で連携して、とにかくインフォーマルであれ、そういう学校をこしらえて、失業している間にそこで勉強しろ、自分で仕事を起こせというように教えるよりしょうがないのではないかと思います。

仕事を自分で起こす可能性はございます。これは各地域とも文化事業に関しては潜在的ニーズはございます。基本的にスポーツも含めた文化ニーズが変わっているのです。最近の新聞もスポーツ面が非常に増えていますから、間違いなく文化的なニーズは潜在的に増えています。ただ、先ほどご指摘のようにリーマンショックなどいろいろなことがあり、それと、そういうニーズを充足する過程で、供給者と鑑賞者のいわばコミュニケーションがないのです。ですから「金がないから行かない」で終わってしまうわけですが、そうではなく、常に地域の文化リーダーと鑑賞者に密接なコミュニケーションがあって、そのコミュニケーションの下で「次はこんなのが欲しいんだ」「もう少し安くしてくれ」という話をしながらやってもらわないといけないのではないかと痛感いたしました。

その意味で、例えば文化ボランティア養成も、先ほどのように専門職との関連を踏まえればやれると思いますし、子どもの文化活動も、文化財教育や、まちづくり教育と結合したらうまくやれると思います。国内外に発信する情報も、特に最近では民間交流が圧倒的な比重で膨れてきて、この力がある限りは、こういうものは放っておいてもどんどん増えていきます。特に留学生と観光客が非常に増えてきたので、本当の意味で国際交流というのは、特に観光客に目を付けた場合、どこでもそのままビジネスになっております。

後継者の育成も、確かに今、厳しいことは厳しいのですが、単に雇用するのではなく、専門職として教育して自立させて仕事を起こさせるという指導が必要です。最初は職人の教育ですから、一定期間は職人として訓練しなければいけないので、これは金もかかりますが、ある程度は本人にも負担してもらって、少なくとも3年ぐらい苦労したら一人前になるという見通しをつけてやって、独立させていくというやり方がいいのではないかと考えております。

今、全国的に職人養成のシステムは変わってきておりますように、でっち奉公式にやるというより3年とか5年とかの期限の間に一挙に教育してしまう際、本人もかなりの経費を負担しておりますが、それで自立していくというケースが結構増えています。

食文化や文化を生かしたまちづくりなどは、本当に富山県は先進的地域だと思っております。むしろ国の方が遅れていると思います。やっとそれが追いついてきたのだと思います。文化というものは資源があって、それが生活の中に入ってくると、それを「文化の文化化」と呼んでおりますが、産業化が起こりまして、従来の習慣や伝統を引き継ぎながら新しい人間の文化習慣が出てくると、そこで産業化が可能になります。ですから食材でも、忘れられていたものが突然生活習慣の中に入ってきて、それが生活習慣になってこそ産業化しますので、そういうプロセスをこれから展開していくことが富山ではできると思っています。

(〇〇委員) 富山県としては結構忙しいのです。非常に活発な活動が富山県の場合はある、それを支えているのは、やはり人の輪だろうと思うのです。

先ほどからお金がないという話もありまして、恐らく東京大学の予算も文化芸術の方にはあまり予算が行っていないだろうと思うのですが、そういうお金がないときには、人の輪、知恵の輪が非常に必要であるのだろうという気がしています。

細かい活動の一つ一つは現に活動しているその間の方々、一つの提案、一つの疑問点から生じてきますが、存在するのは、やはり人と会って、人と仲良くなり、コミュニケーションがそこに成立して、また新たな何か生まれることがあって初めて、こういったことが全部実現しているのだろうと思うのです。あえて言うならば人の輪のシステム化とでもいいですか、金のないときにはそういった知恵と人の輪でやっていくしかないことを痛切に感じます。

もう一つ感じたのは、非常に難しい書類の国の文化行政というものが、富山に追随ではないけれども、富山の後から来ている部分もあるのではないかということは前から一部の人がよく言っておられることです。

一番感じたのは、『『くらしの文化』の振興に着手し』という最後のところで、華道に当たるものは、富山県民芸術文化祭の生活文化展という非常にユニークなものできて、もう相当な歴史を持っているわけです。そういったものが、追随承認ではないのですが、人々の目が向いてきていることを感じました。そういった細かい活動が一つの大きなヒントを生んで、それが先へ先へと行って、時々国文化行政よりも先に出るのだということを実感しております。

それと、アンケートの結果では、「にぎわい創出」ということが大いに増えております。

これは多くの方々の希望でもあり、高齢化のもう一つの側面であると思うのですが、こういった「にぎわい創出」と同時に、やはり生きがいというようなものも、考えていけるような文化行政がこれからますます必要になるのだろうと思いました。

(〇〇委員) 国の文化予算はとにかく少なすぎるという話も共有するところがあります。では民間でお金をつかって、マッチンググラントにして、新しい公共などというお題目は素晴らしいのですが、今、可能性があるとは思えないので、それを掘り起こしていかなければいけないと思います。それを掘り起こすためのエネルギーや方策とかは先にもできましたが、もう少し広くそれをしていくときにどうしたらいいのかということです。また、文化振興財団が、これから国はそこを拠点にしていくと言っていますが、本当にそのようになり得る、背負っていけるような文化振興財団が育っていくのか。問題はたくさん、深いところにあるという感じがします。

富山県はせっかくこの文化審議会でも毎回充実した討議を続けているので、できればどこかの部分で突出してリーダーシップを取るような形になっていければ素晴らしいなと思っています。

(〇〇委員) 資料を見ますと、文化の継承など、継承という言葉がたくさん出てきます。それから文化の創出というのも出てきますが、私が考えるには、文化の継承と創成、今をどうとらえるかというのがポイントだと思います。

例えば建築で言えば、建築文化ということで文化とつながっているわけです。だから今生活しておられる皆さんも、過去の文化とは別に独立して動いているわけではないので、有形無形に過去の文化の影響を受けてきているはずですよ。そこのとらえ方をきちんとしたいなと思うのです。

創成という観点から、何を継承し何を創成していくのかという観点がないと、なかなか技術者等の賛同は得られません。そういう意味では、先ほどの知識基盤の共有化というものがもっともっと強固なものにならないのではないかと考えています。

たまたま富山県の場合は非常に救いだと思うのは、石井知事がデザイン協会などに関連させて、富山における文化を目指した何か一つ新しいものづくりということで一生懸命やっておられることです。そういう意味でデザインの方は少しずつ動いていっておりますが、もっといろいろな分野、例えば軽金属もそうだし、建築もそうだし、車文化もそうだし、

いろいろ枠を広げてやっていかないといけないと思います。ですから、逆に言えばいろいろな材料がそろっていますので、これは粘り強く活動していくしかないですし、そういうことで人が変わり、世の中が変わるということで文化が定着するのではないかと考えております。

(〇〇委員) 文化人ではなく一般市民の見方からすると今、すごくいろいろな文化があり、身近な文化、生活に根付いた文化、今生活していることがすべて文化だと思うのです。子どもたちとよくかかわることがあるのですが、ごく当たり前のことが子どもたちに今は伝えられていない状態で、そちらの危機を私はすごく感じます。

逆に言えば、芸能や音楽といったものは何らかの形で一生懸命振興されていますが、本当に身近にある、例えば食の文化、富山の郷土食などが家庭から消えていってしまっていて、それを誰が伝承するのかということになります。結局、大きな行政の中ではなく、そういうことは生活の中でどんどん継承していかなければいけないので、もう少し何か県民への周知といった、底辺の部分がすごく必要なのではないかと思います。それがどのように行政とかかわっていけるかは難しいのですが、その辺の部分を忘れてはいけないのではないかなと思います。

それを何とかする方法として、やはり学校教育の中に何とか取り入れていくのがまず一つだと思います。学校現場も大変忙しい中ですが、例えば芸能も、今は地域だけでは賄いきれないとなると校区を挙げて、そこに根付いている獅子舞や踊りを学校の中で伝承して、今は何とか残っている状況ですので、身近な文化についても何とかもう少し目を向ける必要があるのではないかと考えました。

(〇〇委員) 地域の文化ということで、私どもは、超一流の田舎を目指そうということのスローガンにしております。地域文化といいますか、今お話がありましたように、お祭り一つにしても、例えば城端の曳山祭にしても、福野の夜高祭にしても、着るものから、食べるものから、音から、楽器から、すべてがずっとそこに伝承してきたものですが、これが非常に継承しにくくなっています。

例えば五箇山でも、観光振興をやろうと思っても、あるいは文化振興ということでいろいろ芸能等をやろうと思っても、人がいないのです。

こうしたときに、やはり人の問題があります。人の力が今、非常に分散しています。お

金の力も、やはり人の力だと思うのですが、それが今、非常にバランスを欠いています。いろいろな地域、地方において、一流の田舎を目指すにはどうするかということ、私はいつも議論しています。そうしたときに、お祭りであるとか生活に根ざした文化を、企業が、それこそ何百万円も何千万円も出せませんが、お祭りだと何十万円で、何とか小さな単位でお金を集めてやってきました。これを進めていくかといったときに、一つ必要なのは、そういう人の知恵を集めるローカルのシンクタンクというか、地域に根ざしたシンクタンクがないと、情報が集まるどころがなく、本当にできないという状態になります。

そういった面で、これは民間でいいのですが、各地域の情報センター的なものを何か各地につくっていき、そういうところに何らかの県とのつながりをつくって、知恵のセンターをつくっていくと、そこに集まった情報で、例えばお金を集めるにしても、やはりそういったネットワークで集めることができるので、必要なのではないかと思います。

南砺市についても、ああいう素晴らしい利賀の芸術文化があるわけですが、地元の人が利賀の方へ演劇を見に行くことが少ないので、ここ1~2年ですが、県の方から少しお金を出してもらって、地元の市民の人たちがバスで演劇祭に出掛けるというようなことがありました。やはりそのように地域の人が動くと、一つの力になっていくのではないかと思います。

(〇〇委員) 今ほどお話があったように、私もこちらに来て、富山は曳山の文化では全国でもトップクラスにあるなとすごく感じておりました、それを作り上げた職人文化、金工師、漆工師、宮大工などを支えている人たちがいるからこそできたのだと思います。

先日ある地域から、大変素晴らしい太鼓台を見てほしいということでした。実は最初は新しくしてほしいという依頼だったのですが、見に行きましたら大変素晴らしい、新しくするよりは修復する方がよいと思いました。

それですぐさま「これは文化的価値が大変高いものだから修復しましょう、その方が安くてもいいものができる」とのことだったので修復にかかりましたら、年号も出てきました。それをとにかくなるべく忠実に再現したいからということで、その地域におられる漆屋さんや金具屋さんといった職人さんの工房を見ますと、単に富山県内のものだけではなく、全国各地のものをやっているのです。ですから漆も再生できましたし、螺鈿も前以上に立派なものが再現できました。

先ほど若手の育成ということで、活躍する場がないということがありましたが、実際そ

ういうところを見ると、細々とそのようにやっている方がおられるのです。ですからそういう情報は、伝統・文化・芸能の後継者の養成が大変大事なのですが、県内で現在活躍されている、文化そのものを継承している職人の方々にはどういった方々がいるかというのをデータベース化すると、新たな発見がされ、あとは後継者の育成といったことをやっていただくことにつながるのかなと思います。

それと今、まちなみ修景が岩瀬や八尾などいろいろなところで行われていますが、そういった場所の空き家活性化事業で、若い人がその修繕した家に実際に住まれて活動しているケースがだんだん増えてきていますし、そういったところで活躍する場、発表の場をどんどん増やしていただいて、修繕した町並みの魅力だけではなく、そこに住む若手の作家の人たちの活躍の場をどんどん増やすといいと思います。

井波や八尾、小杉、城端、先ほど言われた福野など、それぞれの町がまちなみアートですか、ああいったことは大変いいことだと思うのです。

他の委員の方々も言われたように、ある意味で国より富山県の方が先を行っていると思います。こういう行政の技術伝承者への支援とか、先ほど言われた発掘といった面で再発見できる部分も大きいと思いますので、それが観光へとつながっていくのではないかと思います。

(〇〇委員) 今は、芸術文化の秋で、富山の芸術文化が発展していることを実感しています。その一つとして、近代美術館で今やられている富山の若手作家の展示を見て、大変素晴らしい作品ばかりで、富山にいらっしゃる若い美術家も頑張っていると思いますし、近代美術館は世界に誇る富山県の財産の一つとっておりますので、またどんどんいい企画をやってほしいと思います。

東京の指揮者の方が富山にいらしてオーケストラを指導していただいたのですが、水墨美術館にお連れしましたら、とにかくぜいたくな空間だといおっしゃいました。富山はこれだけゆとりがある建物を建てて東京の方がびっくりするというような話をしていました。たまたま「この水墨美術館は『釣りバカ日誌 13』で本木監督がモデルにしたところなんですよ」という話をしたら、その指揮者の方は「いや、釣りバカは全部見えていますけど、じゃあもう1回見直してみます」とおっしゃられており、やはり富山県気質といいましょうか、外に対してPRが下手だと感じました。自分を外に出す性格ではない富山県気質がもっと改善されて、外にPRしていけたらいいなと思いました。

もう1点、資料のボランティア活動のところ、ボランティア活動をしている人が少ないという部分が非常に気になりました。実は富山県にボランティア支援センターというのがありまして、そこに芸術文化協会に所属の団体が文化ボランティアとして参画しております。プロ、アマチュアの演技者、歌手、いろいろなジャンルの方が、例えば慰問に行つてそれを見せるのですが、これも文化ボランティアというとらえ方でいいのではないかとということで数年前に加盟がありました。

従いまして、文化ボランティア活動をしているという決め方で、いわゆるこのアンケートに書いてあるような項目ではなく、もっと広い意味で文化ボランティア活動をとらえていただくと、富山県民はどこかここかで文化ボランティアをやっているような気がしますので、その点をもう一度見直してほしいです。

(〇〇委員) 文学館についてですが、アンケートを見ていると、文学的な散策をしたい、映画を見たいということ望まれる一般の方の結果が出ていました。それは文学館が今目指している、収集し、研究するというところから引き出される楽しみなので、そういう良質な楽しみを長く提供していくためには、基礎となる部分がしっかりしていなければいけません。

もう一つ、伝統文化のことなのですが、おわらが富山県をアピールする一つの祭りになっているのですが、少し地元にお祭りを返してあげて、ほかの祭りも富山県の祭りとしてアピールしていくということがあったらいいなと思いました。

(〇〇委員) アンケートを見ましたら、文化活動に出かけない、ボランティア活動をしていない、文化活動でやってみたいものがあるかないかという部分で、ないという人の中で、「関心がないから」という答えが非常に多くありました。これについては、やはり文化への関心は小さいときに実際に触れたり体感したりしないと醸成されないのかなという気がしておりまして、子どもたちが実際に本物の芸術文化に触れて体感するというのをぜひ大きく重点的に取り上げていただけたらいいなと思います。

要は後継者を育成したり、若手の芸術家を育てたり、まちづくりをする人をつくったりという人づくりのための種まきとして、青少年、子どもたちの近くへ行って見せていただける出張公演や出前講座というようなものについては今後、ぜひやっていただけたらいいなと思っております。